

特集

インタビュー

上田文雄さん (元札幌市長) に聞く

議会決議から始まった

1972年の札幌オリンピックの時は、学生で東京にいました。

オリンピックについて考え始めたのは、2003年に市長になってからです。2005年3月に、市議会が夏季オリンピックの招致決議があつて、私はそれを拒否しました。夏季オリンピックはとんでもないお金がかかります、冬季の比ではありません。当時は小泉首相の三位一体改革で地方交付金が減らされて、どこの自治体も財政難で大変な目にあつていました。莫大な自治体負担を要する夏季オリンピックなんて非現実的で、とてもできないと議会と議論しました。



朝日新聞が熱心で、夏と冬をやるのは札幌しかないというんです。今回、世界で初めて北京が夏冬やりましたけど、当時はミyunヘンがやれるかどうか、やっぱり夏も冬もできる大都市としては札幌が一番だと言われていました。しかし、私は

やるのであれば冬季オリンピックだろうなと考えていました。

札幌のハード面での街づくりは板垣市政時代のオリンピックでほぼ決まったという感じがします。「虹と雪のバード」の「街ができる、美しい街が」という歌詞そのままです。地方都市がオリンピックで国際都市に飛躍していく、大ジャンプの72年だったと思います。すごい冒険でもあつたでしょうし。

私は、オリンピックを市民自治との関係でずっと考えていました。札幌市民のアイデンティティ、精神の拠りどころとしてみると、とても大事なイベントだと、今もそう思っています。

オリンピックの理念

オリンピック憲章は、オリンピックの根本原則ですが、「スポーツを通じて肉体と意志と精神：バランスよく結合させる生き方の哲学」「スポーツと文化・教育を融合」「平和の追求」とあるように、本来のオリンピック理念の素晴らしいさは誰もが認めるものです。人間が高みを求めるといふ、人間の本性を見抜いた上で競うことを哲学化していったんだと思います。

う、国民負担の大きさですね。

長野はひどかった。使途不明金が多額にあり無理をしたツケを未だに引きずっていると感じます。札幌は無理をしなくても、IOCに金をばらまかなくても、大丈夫です。透明性を大事にして、施設整備は当然必要なものに絞り込む。

試算額450億円、市民一人あたりの負担額22,500円の計算になりますが、厳しく査定して無駄を排除する。これは都市ブランド向上のため、3週間世界中に札幌を発信する経費であり、雪まつり期間中のオリンピックは世界に雪と共生する札幌人の創造的文化を発信し、観光インバウンド誘客広報費用であり、国際都市への投資だと言えます。

これをどう稼ぎ出すか。篠路清掃工場廃止を可能にしたのは市民の力でした。市民が毎日ゴミの分別をするゴミ出しルールの実践、いわば市民自身の行動で建替え費用380億円を節約した経験を私たちは持っています。380億円を稼ぎ出したんです。市民による自治の実践で経費削減と環境に優しい循環社会への道を札幌市が示した事例だと言えます。

これからの街づくり

これからの時代に大事なものは何か、そのために行政は何をするか、それと一緒に市民は何ができるか。札幌市がこれまで取り組んできた市民自治の推進や環境首都、創造都市の誇りを

IOCやJOCのあり方は別の問題ですね。商業主義や政治的振る舞いに対する厭世観は少なからず市民のオリンピック離れの傾向を作っていると思いますが、だからオリンピックはダメだとは思わない。もっと健全な財政運営と理念に忠実な行動に努めればよい。開催地ができる限りの努力を示せばよいと思います。開催したいと思っても、どこでもやれるものではありません。札幌はすべての条件に適した場所だと思われており、これを街づくりに生かし利用するのは賢い選択だと私は思っています。

オリンピックと街づくりと市民自治

市長になってから、冬季オリンピックを札幌に誘致することと街づくり、街の発展と市民自治とをずっと前向きに考えてきました。いろいろな考え方はありますが、札幌の歴史を踏まえながらどう街の将来を展望し、どのような都市像を描くかの議論を重ねて参りましたが「世界に開かれた街にしよう」ということになりました。

私が市長になってまもなく人口減について考え始めました。藻谷浩介さんを招いて職員と勉強会などしたのですが、政令指定都市で人口減について考えているのは札幌くらいだとその先見性の評価を頂きました。当時はまだ人口が伸びていましたが、伸び幅が減少し先が見え始め

ていたんです。人口が少ないこと自体は悪くはないのですが、少子高齢社会は稼働年齢人口の減少を意味しますので、世代の循環がうまくいかない人口構造で、経済活性化の方策も含めて各界各層の意見を聞きながら職員と議論し、国際化を含めた交流人口の拡大が札幌にとって極めて大事な柱だと結論しました。

国際化、都市イメージのブランド化、住民の誇りを考えると、「雪」が大事であることに気づきます。これだけの雪をどう生かすか、PRポイントとして大事であり、除雪は大変だ、雪は嫌だと思っても、それでもこの街が好きだという札幌人の心情・気質ですよ。

札幌市民は72年オリンピック開催を担ったという市民としての誇り (Civic Pride) と札幌の国内外における知名度・都市ブランド獲得を経験しています。地下鉄や地下街ができ、高速道路が整備され、都市化が進んで便利になったということだけでは決まれないのだと思います。

市民が一緒に稼ぎ出した380億円

反対する人たちは、オリンピックのどこに反対なのか。オリンピックの理念とこれを実現すること、これに参加すること自体にNO!という札幌市民は少ないと思います。競技内容にはみんな夢中ですよね。サッカーにせよプロ野球にせよ、「見るスポーツ」の概念は既に確立しています。批判されるのは、無尽蔵に金を使っちゃ

柱に、高い理念を掲げてこれからの街づくりをしていく。冬季オリンピックはその契機になると思います。私は2014年のソチ五輪に行くなど様々な調査の上、11月に議会が誘致表明をし市民に実現へのメッセージを送りました。問題は開催経費の負担金450億円を札幌市の行政組織と市民の自治活動で生み出す工夫をどうするかです。例えば、省エネによるコストダウンですね。30年までに市有施設全てについて完全LED化をやり遂げることでどれだけコストを削減できるか。インシャルコストの捻出と運用コストをしっかりと計算して市民に示す。市民も省エネは富を生むことを理解し、ともに活動を展開することでだけの利益が生まれ、環境問題に貢献できるか。

いまお金がかかることにはみんな反対しますが、遠くを見て先を考えたら、今やっておいたほうがいいことはたくさんあると思います。

オリンピックは、世界中の誰でも知っています。3週間世界中が札幌を注視する。450億円が札幌が如何に環境先進都市であるかを広報できる、SDGs実践都市として高い評価を受ける絶好の機会とすべきです。招致と具体的な計画についての透明性と財政的健全性を保ちながら、成熟した市民自治の成果として環境政策実践をしっかりと絡めたオリンピック実現運動とすることがポイントだと思っています。

(聞き手・まとめ 細谷洋子)